

みんなが 動いた。

阪神・淡路大震災
大阪YMCA救援・復興活動報告書



も く じ

大阪YMCA救援・復興活動これまでのかかわり	1
全国YMCA救援対策東本部としての大阪YMCA活動の記録	2～5
• こうして救援活動がはじまった	2
• 今後の取組	4
• 大阪YMCAの救援対策	5
• 組織と体制	5
大阪YMCA救援プロジェクト活動紹介	6～9
ワイズメンズクラブの働き(活動記録)	10～11
応援する市民の会	12
東灘助け合いネットワーク	13
関西NGO医療ボランティアチーム	14
WNN (ワールドNGOネットワーク)	15
JCCCNCより義援金使途プログラム報告	16～19
ボランティア・フォーラム'95	20
海外からの支援レター世界の国から～ありがとうございました	21
募金協力者名簿	22～24
阪神大震災救援物資寄付者	24
大阪YMCA救援活動データ・編集後記	25

大阪YMCA救援・復興活動

これまでのかわり

奇しくも戦後（敗戦）50年の節目に起った未曾有の阪神・淡路大地震は死傷者、倒壊家屋をはじめ私たちのライフラインに甚大な被害をもたらしました。震災から1年が過ぎましたが、被災地は今なお傷痕は深く残り、被災者のニーズはますます個別化し、潜在化し、深刻になってきています。高齢者、障害者、子供たち、外国人、そして家を失い、仕事をなくした多くの人は今なお苦しみを負っています。このような犠牲の一方、ひとつの光明がありました。それは多くの人が「少しでもお役に立ちたい」「何かお手伝いさせて下さい」と救援・復興活動に立ち上がったことでした。また、救援物資や義援金の提供などを通して人々の善意が届けられました。大阪YMCAは震災当初からさまざまな形でかかわってきました。多くの方々の暖かい励ましと応援、協力に支えられてきました。この活動の報告書は、これまでかかわってきました下記の活動を中心に紹介させていただきます。あらためて、みなさまがたのご支援に心から感謝申し上げます。

1) 人的派遣・救援活動

震災発生後、大阪YMCAでは会員、生徒、教職員が個人として、スタッフとして、グループとして、学校としてあらゆる形の救援・復興活動にかかわってきました。大阪YMCAとしては、主に西宮YMCAでの救援活動に応援。

2) 事務局として

- ・大阪YMCA救援対策本部の窓口として。
- ・全国YMCAの救援東本部事務局として。
- ・市民ボランティア「応援する市民の会」の窓口として。

3) 救援物資援助

市民、団体、企業、YMCA関係者等からの救援物資が国内外から届けられた。

4) 募金活動

街頭募金を始め、市民、団体、企業、YMCA関係者など国内外から義援金が届けられた。



神戸大学人社系図



00098105207

全国YMCA救援対策東本部としての 大阪YMCA活動の記録

以下5ページまでの記録は「阪神・淡路大震災救援東本部報(1月17日～2月23日全21報)・大阪YMCA(救援東本部発行)」から特記事項を発行日順に記したものである。

●こうして救援活動がはじまった。

1月17日

- 大阪YMCA総主事、総務部長被災のため、土佐堀館の責任者5～6人が集まり緊急のミーティングを開く。
- 人事部長を救援対策本部長に決め、救援本部を作る。

1月18日

- 大阪YMCAに館長たちが集まり救援対策を協議する。
- YMCAの救援活動と日本YMCAの救援活動東本部を大阪YMCAに置き本部長を田中義宣総主事とする。
- 大阪ボランティア協会、地域調査計画研究所に大阪YMCAが幹事となり救援活動について考え、日本青年奉仕協会や経団連の社会貢献1パーセントクラブ等呼びかける。日頃活動している人たちのグループの協力関係で「応援する市民の会」と名付け、発足。(事務局を大阪YMCA国際・社会奉仕センター内に置く)
- 最初の物資である果物を大阪西YMCAは西宮市役所に届ける。

1月19日

- 朝国境なき医師団が10tトラックで医者と物資、(水、毛布、食料・米)を神戸YMCAに届ける。
- AHI(アジア保健研修所)の医者とスタッフが薬品を持参し神戸に行く。その後も薬品をはじめ医師・看護婦・必要物資を届ける。
- NHKの全国放送(ラジオ)で救援のアピールをする。

1月20日

- 炊き出し隊20時30分に出発。給水用トラックの1台を含む車両6台に物資を満載して長田区の西神戸YMCAへ深夜3時前に到着。早朝YMCAの会員が長田地区に炊き出しと水の配給を行う。

1月20日～2月28日

- 現地ボランティア、現地統括スタッフの派遣及びコーディネート作業。
- 倒壊を免れた西宮、三宮、長田の各YMCAを救援活動センターとして、1月20日からスタッフを派遣し、救援プロジェクトの調査を行う。神戸YMCAは建物が傷んでいて活動停止状態にあり、また、会員の中には亡くなられた方や住居が全壊、半壊された方が多く事業再開は難しい。
- 東本部および大阪YMCAの救援活動場所は西宮YMCA、三宮YMCA、西神戸YMCA、東灘地域、芦屋、豊中地区(YMCA)に拡がった。
- ボランティアは日増しに集まった。

1月21日

- 国際専門学校の学生、教職員38名も西宮YMCAに応援。

1月22日

- 各YMCAで街頭募金実施。

1月23日

- 大阪YMCA事務局(本部)ではボランティアが毎日5～8人電話の対応、コンピューター入力等の活動を行う。
- 大阪YMCAに企業、個人からの救援物資が届く。タクシーの運転手が「いてもたってもいられなくて」と言ってその日の売上げ全額を寄付。YMCA会員、生徒たちや一般市民が義援金を持参した。
- お風呂のサービス始まる(フィットネス・センター)(松尾台幼稚園)1月25日よりヴェクセルでも始まる。
- 物資の仕分けと配布、地域訪問と物資の配布。相談コーナー、受験生ホームステイの受入を開始。



1月23日～25日

- 通行人の給茶サービス(ワイズメンズクラブ)

1月23日～26日

- 「あしながおばさんの会」約700名分の豚汁を提供。

1月24日

- 西宮YMCAでうどん 500食の給食が始まる。
- 医師団の応援あり。看護、訪問、医療医師団の診療補助、診療所活動(看護婦の派遣)。

1月25日

- 東本部対策会議を西宮YMCAで開催、関西地区YMCAの救援対策代表者が同盟および西宮YMCAスタッフと現状における問題点および今後の対応について協議する。
- ボランティア派遣コーディネート(4/7まで対応)各登録ボランティアの資格、特技をデータベース化し、さまざまな団体、個人の個別の要望に対してコーディネートし、派遣。
- 東灘区の本庄小学校、神戸商船大学で神戸市の支援を受け、被災者のホームステイの人選を開始。
- 地域へポケットラジオ(1,000台)、オートバイ用雨ガッパ(370着)、各種テント等三宮YMCA、西宮YMCAに配布。
- 大阪市提供の自転車40台西宮YMCAへ移送。
- 大阪Y労働組合員救援活動に合流。

1月26日

- 人形劇グループ(ゼペット・南YMCA所属)現地派遣。
- (株)ニチヨウや宝くじ協会などから各種のテントが西宮、三宮YMCAに届けられる。

1月27日

- ご飯の炊き出しサービス。
- 京都YMCAスタッフ、レイマン、ボランティア・リーダー等が西宮・三宮YMCAへ緊急に調達した遺体安置所40ヵ所で必要な線香1500人分を輸送。



1月27日

- 全国YMCAからのスタッフ派遣依頼を開始。2月中は名古屋、仙台、東京、滋賀、横浜、栃木、山梨、富山、北海道などのYMCAから応援スタッフが4泊5日の日程で現地(西宮)入り。欠員を大阪・奈良YMCAで補充するシフト・アレンジを行う。
- 2月中は毎週1回程度、現地にて救援本部会議を開き、救援活動の見直しを行う。救援活動は長期化すると予測する。
- THE YMCA『阪神大震災特集』臨時増刊号が、発刊・発行日は2/3日、各YMCAへは2/5日(予定)無料。義援金募金や街頭募金などに利用。なお、大阪青年も2月中旬に臨時増刊号『阪神大震災特集』を発行の予定。

1月29日

- 鍼灸ボランティア(元専任講師池永さんグループ)を現地派遣。

1月31日

- 大社小学校、西宮中央体育館、ルーテル教会の3拠点でボランティア・リーダーによるゲーム指導を開始。

2月1日

- 救援対策東本部を国際・社会奉仕センター内に移動。

2月3日

- 第2回救援本部会議が西宮YMCAで開催。今後の取組について協議する。今後の課題は、現在行っている第一次救援活動を今月末には終了し、第二段階に入る予測をする。したがって今後の救援活動は復興に向けてプログラムを切り替えて行く。(心のケア、レクリエーション指導等)



- 豊中市で北YMCAが、豊中震災支援センターの要請を受けて支援活動開始。福祉ローラー作戦(家庭訪問、ご用聞き)により、家の片付けや地域住民の要望に応える。スタッフ・リーダー、リーダーOB等を派遣して荷物の整理・運搬、民家のがれき・ブロックの撤去作業、お年寄りの介護など。

- 臨時診療所の開設。
- 鍼灸診療所の開設(日・水10時～16時)
- 子供の心のケア(市民体育館、大社小、芦屋山手小、精道小、打出浜小、用海小、本山第3小)
- 理容散髪(西宮YMCA)
- マスコミ、他団体からの問合せに対応と情報提供。

2月9日

- 東京の東が丘児童保育クラブの小学1～2年生児童より、被災者の子供達へ激励の手紙が保育クラブの合唱テープと共に届く。伊丹市教育委員会を通して、伊丹市の被災を受けた小学校へ送られた。

2月10日

- この頃からインターネットパソコン通信を通して情報の収集を始める。それには大阪大学の教員、学生が協力。
- サンフランシスコに本部がある日系米人非営利団体のジャパニーズカルチャーコミュニティセンター(JCCNC)から5万ドルと物資(衣服、ぬいぐるみ、文房具など)が送られてきた。(後日別途10万ドルの義援金が届く)

2月14日

- 守口JCがうどん、雑炊を毎日500人分提供。
- 給水タンクが増え、24時間配給可能となる。
- 50ヶ所の小学校と避難所にレクリエーションボランティア派遣。
- 各地域から集まる情報を生活、医療、福祉、法律などのジャンル別に整理して印刷物を掲示、配布。

2月15～16日

- ロータリークラブがお好焼き、焼きそば、おでん、焼き鳥等提供。



2月20日

- 信州から蕎麦屋さんが来る。

2月23日

- アメリカJCCNCより衣料など大量の救援物資が西宮YMCAに届く。仕分けと被災者ヘライダーボランティアによる配布。
- 大阪北YMCA川西センターでは被災者サービスとして、買物や用足しの間、子供を預かる託児サービスや自習室開放のサービス。

●今後の取組

●大阪YMCA

- 1) 大阪YMCAは継続して、西宮、西神戸YMCAで展開している活動を応援。
- 2) アメリカJCCNCからの義援金でサンシャインキャンプの実施。
- 3) 募金活動を継続して行う。
- 4) 救援事務局は継続して国際・社会奉仕センターで行う。

●全国YMCA

全国総主事会議にて、全国協力を積極的に推進する母体として救援・復興タスクチームと会館事業再建タスクチームが設置された。

3月1日からの運営組織は下記の通り。



- 1) 日本YMCA阪神大震災復興支援事業に関するサポートセンターの設置。(全国から被災地に赴くボランティアの組織化と被災者への長期的復興支援のため。)
- 2) 東本部(大阪YMCA内)は3月1日より西宮YMCAに移動。今後の救援活動は神戸YMCAが西本部(西神戸YMCA)、東本部(西宮YMCA)の責任を持ち総合的に運営する。
- 3) 「日本YMCA阪神・淡路大震災復興協力ワークキャンプ」の第1回が2月26日～3月3日実施以後8月末まで5泊6日の行程で40～50回実施。(ボランティア簡易宿泊施設・サニーボランティアハウスが西宮YMCA隣に設置)継続的なワークキャンプを通して、救援活動を展開する。

●大阪YMCAの救援対策

1) 内部的救援対策 (大阪YMCA内部)

- 1.各YMCAの職員ならびに関係者の安全、消息、被害状況の把握と確認。
- 2.会員、学生、生徒の安全、消息、被害状況の把握と確認。
- 3.各YMCAの施設点検、被害状況の把握と確認。
- 4.各YMCAの日常業務の実施と変更の通達。
- 5.各YMCAの諸規定の変更、追加業務と通達。
- 6.学校、センターのプログラムの実施と変更の通達。
- 7.協力会員、教職員、賛助会社、ワイズメンズクラブへの義援金の依頼状発送。
- 8.各YMCAの後方隊の組織と業務の確認。
- 9.現地リーダー・スタッフの募集と体制作り。
- 10.救援活動

- 救援物資の調達、配布
- 各YMCAからの物資回収
- 車の手配と運行時間の確認
- 義援金の受付
- ホームステイの受付

11.ボランティア保険加入

「ボランティア行事用保険」(大阪府社会福祉協議会)に2月8日付けで加入。保険料は大阪YMCA負担。救援ボランティア活動中の事故に対する保険であるが余震等による災害に対しては保障されない。

保障内容：死亡500万円

：入院1日当り3,000円(通院1日2,000円)

2) 対外的救援対策

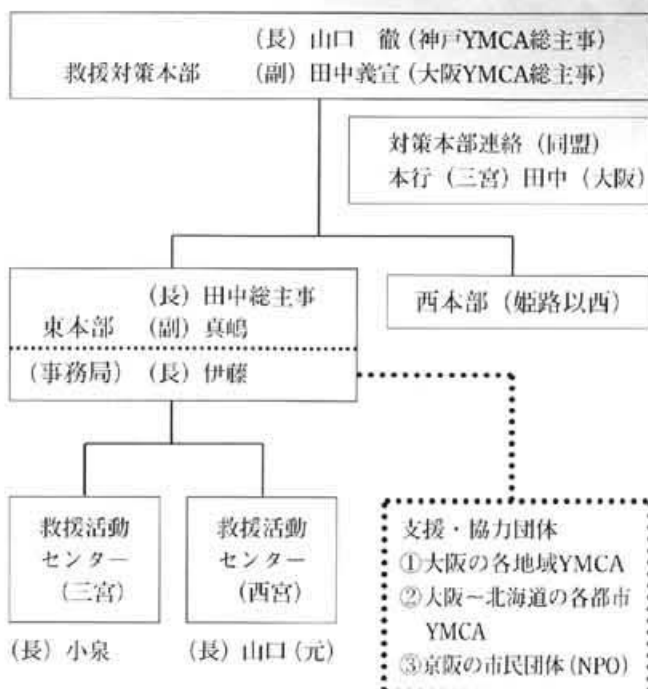
1.日本YMCA同盟救援東本部

日本YMCA同盟阪神・淡路大震災東本部の事務局を大阪YMCAに設置し、西宮YMCAを現地救援センターとして被災者の救援活動にあたる。

2.「応援する市民の会」略称(NPO応援団)

市民ボランティアの受付とボランティア活動、被災した人々を受け入れる家庭の募集、救援物資、募金の受付。

●東本部組織と体制(1月20日)



◇本部体制(事務局)

副本部長：真嶋(YMCA以外対外交渉)

補佐：笹江

事務局長：伊藤(YMCA内部)

補佐：林

スタッフ：水野(学校)、錦織(青少年)、李(国際会員)

レイマン：森本栄(ワイズメンズクラブ)、江指(会員)、恵美奈(国際)

◇活動内容

①プログラム関連事項 ②マネージメント関連事項

- ・救援プロジェクト調査
- ・地域救済本部連絡
- ・ボランティア配置
- ・関係諸団体連絡
- ・ボランティア輸送
- ・同盟各YMCA連絡
- ・給食、宿泊、救護
- ・資金計画、調整
- ・物資調達
- ・記録ほか



大阪YMCA救援プロジェクト活動紹介 (I)

大阪YMCAでは、阪神・淡路大震災において全国YMCAの救援東本部 (YMCA国際・社会奉仕センター内) となり、被災地の、特に西宮YMCAを拠点として救援・復興活動を行った。

大阪YMCA各ブランチにおいても、被災地復興のための後方支援としてYMCAメンバーや、ボランティアリーダー、ワイズメンズクラブ、そして市民ボランティアなどたくさんの協力を得てさまざまなプログラムを展開した。

西YMCA	●ワイズメンズクラブの協力により、西宮YMCAへ救援物資輸送 ●西宮YMCAにて学生・教職員が救援ボランティア活動を行う ●被災地域の小学生を対象にサンシャインキャンプの実施 (1995年6月3日～4日実施) ●大阪YMCA義援金、阪神大震災緊急復興募金への募金活動
南YMCA	●西宮YMCAにて、リーダー、教職員等のべ158名が救援ボランティア活動を行う ●西宮YMCAを拠点として被災地に住む児童を招待してのサンシャインキャンプを実施 (1995年6月10日～11日実施) ●日本語学校アベノ校ー被災した神戸YMCA日本語学校学生の受入れ・大阪YMCA義援金、阪神大震災緊急復興募金への募金活動
東YMCA	●メンバー、リーダー、スタッフ等で近隣駅前にて街頭募金実施 ●河内ワイズメンズクラブの協力で無線の器材提供と人の応援 ●鍼灸医療グループの派遣 ●東YMCAサイクリングクラブ元メンバーによる自転車修理 (於:西宮Y) ●野外活動のメンバーによる西宮YMCA炊出の応援 ●被災された兵庫県ベタンク協会のメンバーを招待してベタンク大会の実施 (1995年5月28日実施) ●大阪YMCA義援金、阪神大震災緊急復興募金への募金活動
北YMCA	●豊中震災支援センターの要請を受け、豊中地区の被災者への救援活動を実施 (ブロックの撤去、荷物整理などのボランティア活動) ●川西センターでは、被災者の方々向けのサービスとして託児サービス、白習室の開放、被災者の会員を対象とする入浴サービスを実施 ●北YMCAと緑地公園で行ったファミリーウエルネスカーニバル (のべ350名が参加) でガレージセールを実施、収益金は復興募金へ (1995年5月27日、28日実施) ●被災した小学生を公募しサンシャインキャンプを実施 (1995年8月23日～26日、1996年1月13日～15日計2回実施) ●宝塚市立すみれが丘小学校で行われた、宝塚地区の被災者支援まつりである「ふれあいフェスティバル」に協賛。職員、ボランティアリーダー10名が参加し、体育指導を行った (1995年10月14日実施) ●大阪YMCA義援金、阪神大震災緊急復興募金への募金活動
北摂YMCA しろがね幼稚園 松尾台幼稚園	●会員、関係者その他を対象に無料の入浴サービスを実施 ●保護者による物資の調達 ●大阪YMCA義援金、阪神大震災緊急復興募金への募金活動
堺YMCA	●南海堺東駅他7駅周辺にて街頭募金実施のべ82名が参加ー348,521円の募金協力を得る ●大阪YMCA義援金、阪神大震災緊急復興募金への募金活動
高槻YMCA	●JR、阪急高槻駅前周辺にて街頭募金実施 ●ワイズメンズクラブと協働で、のべ100名が参加ー2,214,529円の募金協力を得る ●幼児、少年クラスがプログラムの時間を利用し1時間募金活動を行うー319,906円の募金協力を得る ●西宮市内の小学校の文具セットを600セット送る ●大阪YMCA義援金、阪神大震災緊急復興募金への募金活動
社会体育専門学校	●西宮YMCAにて学生、教職員約34名で救援ボランティア活動を行う ●復興協力キャンプ (於:サニタリーハウス) に学生65名が参加 (1995年7月27日～30日、8月4日～7日計2回実施)



枚方YMCA	●被災地の小学生を対象にサンシャインキャンプを実施(1995年5月14日実施) ●大阪YMCA義援金、阪神大震災緊急復興募金への募金活動
ヴェクセル	●会員、関係者その他を対象に無料の入浴サービスを実施 ●被災者の方々を対象にヴェクセル入会金の割引を実施 ●ヴェクセル会員、日本語学校学生による救援ボランティア活動 ●日本語学校ヴェクセル校一被災した神戸YMCAH本語学校学生の受入れ ●大阪YMCA義援金、阪神大震災緊急復興募金への募金活動
六甲研修センター	●会員、関係者その他を対象に無料の入浴サービスを実施 ●被災者の方々を対象に宿泊料金の割引を実施 ●大阪YMCA互助会より職員一人15,000円の復興募金協力 ●大阪YMCA義援金、阪神大震災緊急復興募金への募金活動
徳島YMCA	●徳島県阿南市水道課より給水タンクを借り受け、西宮YMCAの給水活動に運用 阿南国際海洋センター、阿南市の医師2名を西宮YMCAに派遣 ●阿南青年会議所、阿南商工会議所青年部、阿南市国際交流協会、合同の集会(約50名参加)にて、阪神・西宮地区の現状及び西宮YMCAの救援活動の報告を実施した。(1995年2月上旬実施) ●阿南婦人会(約90名)の会員による手づくりクッキー3万個(34袋)を西宮YMCAへ運び、西宮各小学校の避難所でのレクリエーション指導時(西宮Yのボランティア)に配ってもらった。 ●被災地の児童を招いてサンシャインキャンプを実施(1995年5月3日～5日実施)
国際専門学校	●西宮YMCAにて学生、教職員のべ85名で救援ボランティア活動を行う ●復興協力キャンプ(於:サニボランティハウス)に学生2名が参加(1995年7月23～26日実施) ●日本語学科一被災した神戸YMCAH本語学校学生の受入れ ●大阪YMCA義援金、阪神大震災緊急復興募金への募金活動
フィットネスセンター	●会員、関係者その他を対象に無料の入浴サービスを実施、のべ845名の利用があった。(1995年1月18日～4月20日実施) ●大阪YMCA義援金、阪神大震災緊急復興募金への募金活動
大阪YMCA予備校	●西宮YMCA予備校生の安否確認と進学情報の提供・相談 ●大阪YMCA義援金、阪神大震災緊急復興募金への募金活動
呼子高原センター	●被災された中高年の方々を対象にサンシャインキャンプの実施(1995年7月17日～20日、9月18日～21日計2回実施)
国際社会奉仕センター	●復興協力キャンプの実施 ●全国YMCA救援対策東本部となる ●救援ボランティアセンターとしての役割ボランティアの派遣、物資の調達など ●「応援する市民の会」の結成ーボランティアの募集、派遣、物資の調達、ホームステイのアレンジなど ●YMCA義援金及び復興募金事務局 その他大阪YMCA救援・復興活動関係 ●JCCNC義援金による救援活動・サンシャインキャンプ事務局

大阪YMCA救援プロジェクト活動紹介 (Ⅱ)

救援活動現地ボランティア、現地統括スタッフなどのコーディネート作業

ボランティア派遣コーディネート

(1995年1月25日～4月7日まで対応)

各登録ボランティアの資格、特技をデータベース化し、さまざまな団体、個人の個別の要望に対してコーディネートし、派遣した。ボランティア派遣受付件数一のべ20件

- ちびくろ保育園(神戸)…軽トラックで物資の配布をするボランティア
- 淀川善隣館(大阪)…高齢被災者の宿泊施設での介護ボランティア、記者ボランティア
- 盲人文化情報センター(大阪)…事務所ボランティア
AMDA国際医療情報センター(長田保健所)…通訳ボランティア(フランス語)
- 関西NGO医療ボランティアネットワーク(西宮中央体育館)…西宮周辺の診療スポットに医師・ナースを派遣するバイクライダーボランティア
西神戸YMCA(長田)…バイクでの物資の配布をするボランティア
- 西宮YMCA(西宮)…物資の手配、礼状の送付、情報整理などする事務所ボランティア・物資運搬ボランティア
- 神戸YWCAメンタルヘルスサポートチーム
- 岩園小学校(芦屋)…避難所本部ボランティア
- 大阪YMCA川西センター…託児所ボランティア(幼児、小学生と遊ぶ)
引越越し依頼ボランティア



リハビリテーションプログラム/サンシャインキャンプ

被災地の人々、特に子どもたちや高齢者の「心のケア」に焦点をあてたプログラムを寄せられた阪神大震災義援金をもとに継続的に実施

1995年5月～1996年1月まで全11回(内9回は、JCCCNC義援金使途プログラムとして)

阿南国際海洋センターサンシャインキャンプ

日程：1995年5月3日～5日 泊3日
場所：YMCA阿南国際海洋センター
内容：カヌー、カヤック、磯遊び、キャンプファイヤー、たけのこ掘りなど
対象：西宮市立浜脇小・中学校
参加人数：91名

主催：YMCA阿南国際海洋センター
どのようなキャンプにせよ、当然関わるすべての者の「思い入れ」をどれだけ強めるかが大切であることは言うまでもないが今回は特にそのことを意識し、ボランティアリーダートレーニングを行い徹底的にキャンプ作りに没頭してもらった。自然の中で、のんびり仲間と集い、子どもたちに元気いっぱい遊ぶ場と時間を提供すること、そして新たな経験にチャレンジし、それが間接的に彼らの自信を取り戻す機会となればという目的は達成できたと思う。

枚方YMCAサンシャインキャンプ

日程：1995年5月14日
場所：大阪YMCA六甲研修センター
内容：アウトドアチャレンジラリー、山菜採り、野外料理など
対象：小学校1年～6年生
参加人数：43名
主催：枚方YMCA

「震災後のあわただしさも子どもなりに乗り越えつつあるようで、こんな時に体験した雨中の野外活動は親子ともに勇気を与えてくれたようです」これは、参加メンバーの保護者の方から届いたお便りの一部。あいにくの雨だったが震災以後、自然に接する機会が少なくなっていた子どもたちにとって、この経験が自然への新たな興味関心を持つきっかけとなることを願っている。

阪神・淡路大震災復興協力キャンプ

大阪YMCA関係では下記の日程でワークキャンプを実施した。

4月16日(日)～4月21日(金)27名(一般市民ボランティア)

6月4日(日)～6月9日(金)29名(一般市民ボランティア)

7月23日(日)～7月26日(水)3名大阪YMCA国際専門学校

7月27日(木)～7月30日(日)36名大阪Y社会体育専門学校

8月4日(金)～8月7日(月)33名大阪Y社会体育専門学校

主催：大阪YMCA

場所：西宮YMCA、西神戸YMCA

被災から立ち上がり、自分達の生活と地域社会の復興に働く人々の多様なニーズに応えるため、全国のYMCA、諸団体、企業、学校などに呼びかけて、長期にわたるボランティア活動をサニーボランティアハウス(ボランティア宿泊施設)を拠点に展開



<参加者感想より>

私は今までボランティアを特別な活動だともてきました。だから今回の大震災で被災された人達の映像を見ても、「私ではなくても誰かが手助けするだろう」と思って、大阪という近隣にいながら何もせずにきました。というより何をしたらよいかわからないし、何もできないと思いこんでいました。ボランティアに参加して、なぜあの時すぐに行動できないのだろうと考えてきました。困っている人がいたら助けあげるという当たり前のことを無視してきた人間にいざという時に何ができるのだろうと思いました。ボランティアは、今回の時だけでなく、自分の身の回りにいっぱいあるのだと気づかせてくれました。(1995年4月16日～21日参加)

大阪YMCAチャリティ・ラン

(特に被災地障害児プログラムに視点をあてて)

心身に障害を持つ子どもたちを対象として、全国のYMCAではいくつものサマーキャンプを実施、チャリティ・ランはこれらのキャンプを実施するための募金を目的としたマラソン大会です。今回、大阪YMCAでは特に阪神大震災で被害にあった障害を持つ子どもたちをばげまし、サマーキャンプに招待した。

日時：1995年6月18日(日)

場所：大阪城公園

主催：大阪YMCA

参加：35チーム(35チーム×6名)

協力ボランティア数：約200人

チャリティ・ラン支援金：2,624,801円

上記の支援金(募金)を用いて9つの障害児支援プログラムを実施。その内、被災地障害児プログラムとして「特別フィットネス余島キャンプ」(ハンディキャップを持った子どもたちのための余島キャンプ)を1995年8月10日～14日、8月14日～16日の計2回実施、計64名の参加であった。



阪神・淡路大震災神戸YMCA復興募金チャリティコンサート

「レーナマリアコンサート」実施

実施日：1995年11月4日

会場：神戸文化ホールにて実施

主催：近畿圏YMCA

チケット販売売り上げの一部を神戸YMCA復興募金へ

～慶州から阪神大震災に心を痛めて～

韓国女流陶芸家、「愚香、金斗先韓国伝統チャリティー陶芸展」阪神・淡路大震災で未曾有の被害を受けられた被災地の方々に少しでもお役に立てればとの心温まるお申し出により韓国で異彩を放つ徐羅伐窯業金斗先女史の陶芸展を実施し、たくさんのボランティアの方々の協力を得て開催。

売上げの一部520,000円を神戸YMCAに震災活動支援金として寄付した。

開催期間：1995年12月14日～20日

主催：大阪YMCA国際・社会奉仕センター

会場：大阪YMCA会館1階

来場者数：約200人

協力ボランティア：約20人

ワイズメンズクラブの働き

畠平 雅生(震災当時中西部部長)

ワイズメンズクラブは、個々のメンバーが「強い義務感を持つ。義務はすべての権利に伴う」をモットーとしている国際奉仕団体です。主にYMCA運動に対するサービスクラブとして活動し、毎月定例会を行ってメンバーや家族間の垣根を低く、お互いの親交と研鑽をもとに奉仕活動を行っています。今回の震災でもこの機能は発揮され、震災直後の安否確認に始まり、動けるものは当日早朝からの救出や援助へと活動を開始。この輪の広がりは、クラブ単位から部・区・地区・国際へと拡大し、現在も長期支援活動は継続事業として続けられています。今回、阪神・淡路大震災後一周年にあたって活動を振り返り、今後の糧にしたいと思います。震災発生から1年、被災地神戸の復興は著しく、昨年12月に行われた電飾輝くルミナリエを見学した時、地震に負けない底力を感じさせられました。しかし神戸の再建はこれからが本番。我々ワイズメンズクラブも教えられることが多く、これからどの様に取り組み、又この様な事が再発した場合の対応策について考える「阪神大震災を総括する会」を、1996年1月28日、大阪YMCA内レストラン、ラ・ベにおいて開催しました。この会には、当時の西日本副区理事、阪和部・中西部両部長及び現両部長、両部のメネット主査(部婦人代表)を始め、活躍した方々の有志が参加、体験とこれらを生かして今後災害及び緊急事態が起こった場合どう対応するかと言うテーマで話し合いました。ボランティアとは何か？本質を考えさせられる会でした。又、自発的に何かをしたいと言う魂のふるえと共に活躍した人達と職業の一部として働いた人との格差。日常での生活や行動の中で、責任感とリーダーシップの取り方や組織運営、被災された方々やボランティアの方々を含めた生き様を見せられる出来事でもありました。今後はこれらの検証をもとに、ワイズメンズクラブとYMCAの関係も、ワイズメンズクラブの拡大と組織の確立を求めつつ、緊密な繋がりの中で真のパートナーシップの在り方や混迷する現在にあって21世紀へ向けての手がかりとなる指針を得るためのチャンスとしたい。

●1月17日～18日

震災発生直後から各クラブやメンバー間で安否の確認を行う。同時に、個人ボランティアとして、被災メンバーに対する現地救援活動を各自行う。

●1月19日

震災発生後初めて夕方に開かれたYMCA救援対策会議に出席。救援活動の一元化と効率化を計るためYMCAと一体となって活動することを確認。窓口の一本化と有効な救援活動が行えるよう計る。

●1月20日

阪和部、中西部合同で対策に当たることを確認し、連絡伝達網を完成させる。この夜、第一便として、大阪YMCAと共に震災地、神戸長田区の西神戸YMCAへ各自各クラブにて集めた救援物資を満載して出発。刻々と変化する現地の状況と要望に即応する体制の必要を痛感する。当時阪神電鉄の終着駅となっていた阪神甲子園駅前、藤原氏(大阪西クラブ)所有のビル1階部分を緊急救援センターとして開所することを決定、準備に入る。建物に重大な被害を受け、奥様を始め、身内の方々も怪我をされ、命からがら救いだされた親類等、混乱の中にあって献身的に協力いただいた藤原氏に感謝である。

●1月21日

トイレ用おまるを始め、必要資材の搬入と開設準備を行うメンバー婦人の活躍はすばらしく、連絡、救援の主体となる。

●1月22日～25日

緊急救護所を開設(阪神電車の神戸寄りの青木駅まで復旧したのに伴い、甲子園駅前の緊急救援センターを閉鎖)

この間、約2000人の方々に無料自転車・温かい飲物・食べ物・救援物資等々、刻々変わる緊急必需品をメンバー及び各クラブの支援のもとに無料配布。物を含め、やすらぎの場と心のケアの大切さを教えられる。活動の中、特筆すべきことは、この混乱の中にあっても無料貸自転車一台失われることなく帰って来たことに代表される。被災者および救援に向かわれた方々のすばらしい対応力と態度だった。

●1月26日～

以後、近隣の者は個人やクラブ単位で活動。全国各地からは、発信された救援要望内容に応えるべく、続々と物資をはじめとする援助が到着。緊急救援から初期救援活動へと体制を変えていった。現地の要望を最優先した支援活動が行われたことは特筆すべきことだと思われる。

●3月26日

それまでに神戸をはさんで、東と西から行われていた初期救援活動の一応の区切りとして、西副区主催の「阪神・淡路大震災チャリティバザー及び音楽、炊き出しの会」を2ヶ所に分けて開催。東灘区の天井公園で開かれたチャリティバザーには、北は北海道から南は九州まで救援物資が集められ、この売上金は、現地活動拠点と西宮YMCAに二分して贈呈した。また、西宮YMCAで行われた炊き出しと音楽会は、通常救援活動の一つの区切りと言える。この時点より、中・長期支援活動に入り、YMCAとワイズメンズクラブのパートナーシップのもと、現在も、全国規模で支援活動を展開している。



阪神・淡路大震災の体験を次の糧に

岩本 章 (阪和部部長)

阪神・淡路大震災後1年を経過して総括をする会が開かれました。中西部、阪和部から当時奉仕活動に参加されたワイズメンズクラブメンバー、メネット、そして被災者としての体験談を交えて意見交換が成されました。震災以来、様々な形で救援活動が行われましたがワイズメンズクラブにおいてはメンバーが自主的に立上がり、とにかく現地に駆け付け、何か自分にできる事はないか？という奉仕精神で行動することからスタートしました。給水のサービス、炊き出し、各地から寄せられた救援物資の整理と数え切れない仕事の中から、できる事から始めていったようです。そして、それらの活動を中心に人が人を呼び、又YMCAを通じての連携プレイへと広がって行きました。奉仕の内容も初期には水、食料、衣類などの物資の補給が主でした。次にはこれらの物資の整理、配給をする人、又精神的にバランスを失った被災者の心のケアをする人へと移り変わりました。ボランティアとして多くの若者たちが全国から集まりましたが、特にYMCAのボランティアリーダーの働きは多くの人に感動をあたえました。人から最終的にはお金へと移り、復興募金運動としての活動は今も様々な形で行われています。全国各地では多くのYMCAの子どもたち、ワイズメンズクラブメンバーの参加による募金活動が行われ救援資金が集められました。ワイズメンズクラブの活動として日本区からの呼びかけで神戸YMCA復興に向けて向こう3年にわたり毎月募金を送り続けようとする運動はワイズメンズクラブならではの活動として脈々と続いています。

今回の総括は我々ワイズメンズクラブにとっても大きなテーマを与えてくれました。今後同じような災害が起こった時どのように対処するか、緊急時における情報の把握、ワイズメン、YMCAとの連絡網の整備、奉仕活動にかかるファンド作り、色々な意見交換が成されました。すなわち緊急時における危機管理体制作りが大きな焦点となりました。そして何よりもこれらの活動を通じて私たちの奉仕が決してその場限りの奉仕として終わらず、継続する事の大切さを確認して閉会しました。

応援する市民の会



1月17日(火)早朝、阪神・淡路大震災は想像を絶する被害をもたらした。この事態に対し、1月19日(木)には国や行政にすべてお任せするものではなく日頃市民活動を行っている個人や団体が集まって、現地の団体と連携を取りながら被災地での救援活動を展開しようと、大阪YMCA、大阪ボランティア協会、地域調査計画研究所を中心に、関西NGO協議会、経団連1%クラブ、日本青年奉仕協会等などにも呼びかけながら「応援する市民の会」を結成。事務局を大阪YMCA国際・社会奉仕センター内に設置した。当初は唯一鉄道による交通手段が確保されていた阪急「西宮北口」駅に現地事務所を開き、一般市民参加型のボランティア・センターとして市民の手による緊急救援活動を始めた。全国より押し寄せてくるボランティアの数は私たちの想像をはるかに上回り、2月には平日でも300～400人、週末には500人を超える市民ボランティアが救援活動にやってきた。初期の活動は、ボランティアに対するコーディネートをしなが、近隣住民への救援物資の提供や、洗濯、荷物出し、廃材処理、外出同伴をはじめ、ホームステイ先の紹介、生活情報の提供等を行っていた。その後、鉄道の復旧にともない、芦屋市に現地本部事務所を移転、神戸市東灘区に「出張所」を開設し、西宮市、芦屋市、神戸市東灘・灘区周辺を活動範囲として取り組んで来た。また、現地で徐々に地元ボランティア・団体や個人が復活するに伴い、被災直後の緊急救援活動「応援する市民の会」単独の行動から、「東灘地域助け合いネットワーク」の試みのように、被災地のボランティア・グループや被災者と一緒に協力しながら復興事業のお手伝いをしたり、あるいは地元のボランティア・グループが取り組む自立のための活動を支援する態勢へと活動形態を地元主導へと移行していきました。そして、5月14日(日)をもって現地でのボランティア受付を終了し、その後は膨大な活動記録や資料の整理、参加ボランティアに対するアンケート調査の実施、ボランティア・コーディネーター養成講座の開催や、仮設住宅や地道な活動を続けるボランティア団体に対する支援活動や資金援助等を行ってきた。なお、「応援する市民の会」は1996年2月末日に支援活動を全面的に終了した。

東灘助け合いネットワーク

長尾 ひろみ (大阪YMCA協力会員)

1995年1月19日に大阪YMCAより連絡があり、長田に炊き出しに行つて欲しいとの依頼をうけた。すぐにスーパーを経営しているワイズメンズクラブメンバーに連絡し、豚汁500人分の材料をYMCAに届けてもらうことにして、YMCAに直行した。材料と水と大鍋、それに積めるだけの救援物資を満載し、混雑をさけて夜中の2時に大阪駅前を出発した。国道2号線を西に向かい西宮、芦屋と過ぎるにつれ、まるでゴーストタウンに入つてゆくような恐怖に震われた。沿道の家々はつぶれたり傾いたり、どれが垂直の線か分からなくなり、頭がくらくらしてくる。文化住宅はまるでマッチ箱を押しつぶしたように一階は二階に押しつぶされていた。神戸に入り、三宮までくると道は亀裂と段差でがたがたであった。元町の商店街はビルが焼け焦げていた。飴の様にひん曲がったアーケード



をくぐり抜け、瓦礫でふさがった道を迂回しながら、6時半に長田にある西神戸YMCAについた。雨のなか、車の窓をあけた私はてっきり車がオーバーヒートしたと思った。それはテレビでは伝わらなかった町の匂いであった。西神戸YMCAはビルに亀裂が入り、壁が落ちていたが体育館は義援物資で一杯だった。その日は前の晩から雨がきつく降っており、公園の一角でフライをはって炊き出しを始めた私たちには、どれくらいの人達が食べにきてくれるか心配であった。しかし、豚汁が出来上がった時には、崩壊した町のあちこちから人が出てきてくれた。あるお爺さんは私たちに手をあわせてくれて「震災いらいはじめての熱い食べ物ですよ」と言って涙を流してくれた。また一人で来ていたご婦人に「どうぞご家族の分も持っていってください」と言ったとき、その人は「いいえ、生き残ったのは私一人ですから」と言われ、何も返す言葉がなかった。その次の日から、大阪YMCAと大阪ボランティア協会などが協力して組織した「応援する市民の会」に入り物品整理をはじめた。そして阪神電車が青木駅まで延びた時、「応援する市民の会」の一前線基地として東灘区の甲南教会の同胞幼稚園の園庭を借りることができた。偶然そこで神戸ワイズメンズクラブの鈴木誠也さんに会い、アジア協会・アジア友の会を通してジャイカの海外援助物資であるテントを借りることができた。当時、神戸ライフケアセンター理事の中村順子さんが、被害にあった高齢者を一軒一軒バイクで訪問していた。我々は震災で機能を失ってしまった東灘区の高齢者ケアの再構築を目的に、「東灘助け合いネットワーク」を組織した。大阪YMCAに登録したボランティアの中から長期で活動が続けられる人を中心にして活動を開始した。水汲み、瓦礫運び、荷物出しをはじめ、病院への付添いなど、4月2日にテントをたたむまで約300人の若いボランティアのコーディネートにあたった。「何かする事ないですか」とリュックを背負った若者がテントの前に立つ。我々の仕事は地元のニーズとボランティアを結び付けること。時がたつにつれてニーズもかわり、仮設風呂を公園に作ったり、洗濯サービス、留学生のホームステイの仲介、バザー等、被災地と「外」を結ぶ中継地となった。サンフランシスコのJCCNCからの義援物資の一部や全国のワイズメンズクラブが提供してくれた食器類も、地元の人や仮設住宅入居者を対象に格安バザーを行い、その収益は東灘区の医師会に献金した。「東灘区助け合いネットワーク」は新しいかたちの高齢者ケアボランティア団体として立上がり、現在、地元の人達を中心に東灘区役所内で活動が続けている。



関西NGO医療 ボランティアチーム

関西NGO協議会（現在27団体が加盟）に対して、1月18日（木）付けで同協議会事務局長であり、大阪YMCA国際・社会奉仕センター館長真嶋克成氏より、被災地での緊急救援活動の協力要請を出した。「関西NGO医療ボランティアチーム」は、それに応じる形で医療面での救援活動を目的に関係団体が、ゆるやかなネットワークを形成しながら、1月19日（木）に活動を開始した。震災直後の異常かつ不自由な状況の中、被災という大きな試練の中で被災者の身体と心の健康保持のためにすこしでも役に立つ協力と機敏なる医療保健活動を進めることに多くの医療関係団体や医療関係者が賛同した。SHARE、淀川キリスト教病院、アジア保健研修所、愛知国際病院、日本キリスト教海外医療協力会をはじめ多くの病院の協力が重ねられた。また、個人のボランティアの申込みが無数寄せられ、一時は申込みが殺到し、現地の窓口センターの電話がパンク状態となった。第3週目からは1週間単位でのボランティアを主に引き受けた。登録総数、実活動人数は560名を超えた。その連絡センターとしてJOCS（日本キリスト教海外医療協力会）関西事務所があたり、医療関係団体やボランティアの調整を行った。現地の活動の拠点としては、大阪方面から最も近く、避難所としては最も大きい西宮市の中央体育館に設置して活動を開始した。3月14日（火）まで55日間におよぶ緊急医療援助活動をおこなった。



協力団体

SHARE、東芝病院、東芝林間病院、福島県立医大（総合会津中央病院を含む3つの関連病院）、とちの木病院、淀川キリスト教病院、アジア保健研修所、愛知国際病院、新生病院、山口昭和病院、聖路加看護大学（国際病院）、兵庫県看護協会、キリスト者医科連盟、日本キリスト教海外医療協力会、日本薬剤師会、兵庫県薬剤師会、岡山博愛会病院、倉敷市立児島市民病院

現地センターの調整

医療コーディネーター（責任者1名のほか1～数名で、大体5日～10日交替で引き継いだ）、事務コーディネーター（1～3名）の3～6名のチームで、任務は諸団体、個人ボランティアとの調整および行政や他団体、常設診療所や巡回医療班との連絡、調整、西宮体育館に寝袋で泊まり込み、2月28日に西宮市内の3カ所に常設クリニックを撤収。その後は神戸市灘区にある灘小学校の避難所に本部を異動。併せて現地本部のコーディネーターの数も減らした。

医療活動

初期は、西宮市内の巡回診療が主体であったが、次に8カ所に常設クリニック（24時間受入れ）を開設。西宮中央体育館（現地連絡本部のある避難所、巡回は2月18日で終了、2月28日に撤収した。平木小学校（2月22日撤収）、平木中学校（2月18日撤収）：以上西宮市。なお、平木中学校は兵庫医大の医師が巡回。住之江公民館（神戸市東灘区、2月15日撤収）、灘小学校（主に東芝病院、東芝林間病院、聖路加国際病院が受け持った。3月14日撤収）六甲小学校（SHAREが受け持った、3月1日より縮小、撤退）、磨耶小学校（福島県立医大およびその関連病院が受け持った。1月25日に開始、1月29日撤収）

西宮市、神戸市灘区、東灘区において展開された関西NGO医療ボランティアチームの活動はこの度の震災の中で自発的に形成された多数の医療ボランティアの寄り合い所帯であったが、西宮市の中央体育館を拠点とする活動は2月28日（火）、神戸市灘区、東灘区での活動は3月14日（火）、灘小学校での活動を最後として医療活動をすべて撤収。いずれの地域も保健所、医師会、日赤救護班、残留ボランティアの方々の協力と被災された方々の理解をもとめ、極めて順調に引継ぎをし、撤収した。

WNN(ワールド NGO ネットワーク)

震災では、ライフ・ラインのひとつである情報の遮断や偏りが問題となった。特に、日ごろの通信手段、情報源であった電話、FAX、新聞、テレビ、ラジオも被災地の人々の個別のニーズには十分には対応しきれなかった。その穴を埋め、かつ想像以上の役割を果たしたのが口コミ、地域密着のミニコミ紙、アマチュア無線、そしてインターネット、パソコン通信であった。震災直後、阪神地区へのNTTの電話回線は通信制限措置がとられていたが、パソコンによる情報通信はほとんど混雑による通信制限をきたすことなく、被災地は全国とつながっていた。この結果、震災直後からはインターネットニュース上に震災のための緊急ニュースグループが作成され、そこに生活情報、開店している商店、風呂屋、ライフライン、交通、行政、医療、住宅、物資、避難所、市民団体、教育、動物、ペット、死亡者リスト、安否情報、被災地の人々の声、被災状況、ボランティア・レポート、募金、ミニコミ紙、献血、障害者、外国人、アマチュア無線などのありとあらゆる情報が流れた。これら情報は、情報ボランテ



ィアと呼ばれた人たちが自転車やバイクで各避難所をまわり、何が不足しているのか、困っていることは何かを調べた上で、その情報をインターネット上に流していた。現地からの生の情報の一方で、被災地から離れた人々は、各種マスコミ情報などをもとに必要と思われる情報を分野別、地域別に整理してネット上の電子掲示板に流した。そして、被災地の人々からの要望に応じて、ネット上に蓄積されている豊富な情報の中から必要な情報を検索し、紙に印刷されたものを配布してまわった。

このような状況の中、震災から2週間がたった2月1日(水)にインターネットユーザーであり、震災直後からインターネットを利用して情報ボランティア活動をしていた大阪大学の水野義之助教授(核物理研究センター)が大阪YMCA国際・社会奉仕センターにやって来た。水野さんは、「被災地の人々を応援する市民の会」や「関西NGO協議会」の事務局機能がある国際・社会奉仕センターと大学、学術研究機関の電子ネットワーク構築を手掛けていた大阪大学の「大型計算機センター」・情報工学科の下條真司助教授の協力を生かしながら、情報による救援活動を進めたいことを強調した。

この結果、インターネットで情報ボランティアを募集し、「大阪YMCA国際・社会奉仕センター」、西宮市や神戸市東灘区、灘区を中心に震災応援をおこなっている「西宮YMCA」、震災関連の市民団体160団体を組織する神戸の「阪神大震災地元NGO救援連絡会議」の3カ所に活動拠点をつくっていった。しかし、最初はほとんどの市民団体は、インターネットを使うための技術、知識をもっておらず、日常の活動が忙しかったため人的、時間的余裕もなかった。また、電子ネットワーク自体に関する理解がなく、何に対してどのように使うべきかわからず、組織自体がそれを使うような体制になっていなかった。そのため、インターネット利用の技術をもっている情報ボランティアが、市民団体の活動の中に飛び込んでいって、スタッフに技術を教え、共同作業を行うことで、情報化のサポートを進めた。このようにして、被災地で救援活動をしている市民団体が効率的活動を行うために、インターネットを使って、情報機能のニーズがある団体を側面から支援し、かつ団体間の情報ネットワーク推進のサポートを始めた。幸いにして、多くの企業や団体からの協力で、活動の各拠点に専用パソコンを設置し、ISDN回線を引いてインターネットをフル活用することができた。

現在、WNN(ワールドNGOネットワーク)は、ボランティア団体の情報化やネットワーク化を進めるためにインターネットや電子メールの活用方法や技術を学んでもらうセミナーや技術指導をおこなっている。

JCCNCよりの義援金使途プログラム報告

アメリカ・北カリフォルニア日本文化コミュニティーセンター(JCCNC)は1995年1月17日、阪神・淡路大震災において、いち早く救援活動に立上がった。一人一人の気持ちを大切に、人の心を贈るということを方針として「救援募金集め」の呼びかけから始まり、日系米人を中心に広く一般市民約4万人の人々の草の根運動に拡がっていった。したがって、阪神・淡路大震災の救援センターとなり救援物資ならびに義援金を大阪YMCAに届けた。

①緊急救援・復興活動

¥1,283,692.

被災地での炊き出し、カイロ、ポリタンク、医薬品など様々な生活必需品の購入、救援物資提供、物資配布、運搬のための車輛、ガソリン代など。

②リハビリテーション活動

¥9,447,726.

サンシャインキャンプを実施するにあたって

大阪南YMCA 石原 福造

阪神大震災の救援や復興のためにYMCA救援



センターを各地に開設し、被災者、被災地に直接的な救援活動を行って来たが、震災で受けた心の痛手は計り知

れないものがある。学校や公園は罹災された方々の生活する避難所やテント村となり、トラックや重機が行き交う街では粉塵が舞い、落ち着かない騒然とした場所となった。今、私たちのできる応援は阪神間の避難所をはじめ、被災地にいる子供たち、家族、高齢者

をキャンプに招待しリフレッシュとふれあいの場所を提供することである。特に子供たちや高齢者の「心のケア」に焦点を当てたプログラムを継続的に実施する。



1.阪神大震災被災地域在住者ペタンク招待大会

- 日 時：'95年5月28日 10時～15時
- 場 所：東YMCAグラウンド
- 参加者：招待者、一般参加者合わせて約110名
- 内 容：ペタンク大会
- 主 催：東YMCA

震災に遭われた兵庫県ペタンク協会のメン



バーを招待して設立記念大会を行った。8チームが参加して、広いグラウンドでのゲームを楽しんだ。

2.西YMCAサンシャインキャンプ

- 日 時：'95年6月3日～4日1泊2日
- 場 所：大阪YMCA六甲研修センター
神戸市灘区六甲山町北六甲875
- 参加者：45名(小学1～5年生)
- 内 容：場内散策、自然の切り絵、ゲーム大会、ボート乗船等
- 主 催：西YMCA

雨で野外プログラムが中止となり、子供たちは残念だったが落葉や木の実を集めて、屋内で楽しそうにワイ



ワイガヤガヤ、喋りながら作品を作ったり、ゲームなどに満足といった感じだった。

3.南YMC Aサンシャインキャンプ

- 日 時：'95年6月10日～11日1泊2日
- 場 所：大阪YMC A六甲研修センター
- 参加者：46名(小学1～6年生)46名(20～70歳代)
- 内 容：キャンプファイヤー、ハイキング、探
険ネイチャークラフト等

●主 催：南YMC A

終始楽しい雰囲気ですぐ夕食を終え、就寝を迎えるにあたって「二段ベットの上で寝て、地震が来たらリーダーどうしよう?」「上の段では寝たくない」と発言があった。また、水道の水が少しでも漏れていたら、水がもれている!と堅く蛇口を締める子供がいたり、布団の上げおろしや食事の片付けなど、多くの子供

たちがリーダーから言われるまでもなく手伝いを進んでするなど、避難所生活の影響がしのばれる状況であった。



4.がんばろう神戸!リフレッシュ! in 余島

- 日 時：'95年6月16日～18日2泊3日
- 場 所：余島キャンプ場 香川県小豆郡土庄町字余島
- 参加者：46名(18歳以上)
- 内 容：キャンプファイヤー、魚釣り、カヌー、島巡り、ナイトクルージング等

- 主 催：神戸YMCAウエルネスセンター三宮
全てのプログラムを自由参加とした。年齢、性別に関係なく久しぶりに各々のペースで自由にのんびりと過ごすことができて良かったという声がたくさん届いた。



5.阪神・淡路大震災森林体験キャンプ

- 日 時：Aコース'95年7月17日～20日3泊4日
Bコース'95年9月18日～21日3泊4日
- 場 所：YMC A呼子高原センター
鳥取県日野郡日南町菅沢呼子
皆生温泉 鳥取県米子市皆生新田3-1-7
- 参加者：Aコース32名
Bコース29名(51～70歳の高齢者)

- 内 容：森を知ろう!森を楽しもう!(ゆた



かな緑の森で心と身体をリフレッシュ)野鳥観察、森林体験(枝打ち、間伐)、クラフト、

キャンプファイヤー、ハイキング等

- 主催：大阪YMC A呼子高原センター大阪事務所

◇震災の後遺症を持ちながら、避難所生活・仮設住宅で暮らす人々、被災地の制限と制約の日常生活から開放された老若男女が、大自然の下で思い切り手足を伸ばし、新鮮な空気を胸いっぱい吸い込んで、採りたての食物を沢山食べ、欲びを分かち合う仲間と共に、身も心も晴やかに大いに楽しんだキャンプであった。

「同じ境遇にいる人が明るく物事を一生懸命対処されている姿を見て、大きな驚きと感動を覚え、「負けておれない」と、希望をもった。明日からは被災者の衣を脱ぎ捨てて再建に向かって



頑張ります。森林体験は本当に有意義でした。新しい仲間とともに笑いあえて良い思い出ができた。」

「家が倒壊して今までの写真が失くなった。このキャンプの写真は私の一生の思い出の写真となります。」というご夫妻の笑顔が印象的だった。

6.長田区青少年サマーキャンプ

- 日 時：Aコース'95年7月31日～8月2日2泊3日
：Bコース'95年8月10日～8月13日3泊4日
- 場 所：神戸YMCA沼島キャンプ場 兵庫県三原郡南淡町字沼島
- 参加者：Aコース63名、Bコース30名
- 内 容：水泳、カヌー、ボート、野外料理、魚釣り、キャンプファイヤー等
- 主 催：西神戸YMCA

“のんびりすごそう”子供たちがしたいことをできる限り、子供たちの好きなようにまた、時間を忘れるぐらい遊ぶように働きかけた。長田区に居住する障害児5名が含まれており、健



常児と共に参加できるプログラムが無い中で保護者の間でかなりの関心を得られた。

7.北YMCAサンシャインキャンプ

- 日 時：'95年8月23日～26日3泊4日
- 場 所：大阪YMCA阿南国際海洋センター
- 参加者：29名、小学生
- 内 容：海水浴、カヤック、ヨット、野外料理、カヌー、キャンプファイヤー、ボート、魚釣り、磯遊び、無人島探検等
- 主 催：北YMCA

対象者は豊中市、池田市、箕面市、川西市、宝塚市在住者で阪神・淡路大震災において罹災（家屋全壊および半壊）された家庭の小学生である。主催者側として、キャンプ実施にあたり、子供たちとの触合い・保護者との会話を目的としたアンケート調査を行った。その結果「子供たちは嬉しい」の一言であった。

8.サンシャイン少年少女キャンプ

- 日 時：'95年8月28日～30日2泊3日
- 場 所：神戸YMCA余島野外活動センター 香川県小豆郡土庄町字余島
- 参加者：54名（小学3～6年生）、3名（先生）

- 内 容：キャンプ、キャンプファイヤー、水泳、スカベンジャーハント等、グループで話し合ったり、楽しんだりする過程を大切にプログラムを実施。
- 主 催：神戸YMCAウエルネスセンター三宮 全員、震災を受けている子供たちである。夜「窓、マド」と叫ぶ子供「待って!」と叫ぶ子供、TVのアニメを見るように震災の様子を語る



子供がいた。この心のストレスを根気よく解放させるプログラムを仲間とともに繰り返す必要性を感じた。

9.北YMCAサンシャインスキーキャンプ

- 日 時：'96年1月13日～15日2泊3日
- 場 所：福井県六呂師スキー場
- 参加者：被災した小学生3年～6年生40名
- 内 容：スキー、雪あそび、ゲーム大会

震災後、1年にあたるこの時期に、キャンプを実施するにあたりスタッフ・リーダー一同緊張感をもって準備した。実際に会ったこども達は明るく素直で、震災時やその後の状況についてリーダーやほかの友達にも話していた。新たな環境に前向きに立ち向かっているたくましさを感じた。

※上記2、3、のプログラムに対して、募集事務局となった西宮YMCAへ事務局経費として¥300,000。

③リーダーシップ養成支出	¥669,243.
--------------	-----------

1.神戸YMCA復興キャンプ

サニーボランティアハウスでの救援活動に大阪YMCAの専門学校生が参加、被災地での様々な救援ボランティア活動を通じて、ボランティアやリーダーシップの養成。

'95年7月23日～26日大阪YMCA国際専門学校生 2名
7月27日～30日大阪YMCA社会体育専門学校生 34名
8月4日～7日大阪YMCA社会体育専門学校生 31名

2. ボランティアコーディネーターのためのマニュアル提供 図書購入400冊

1992年ハリケーンアンドリューの教訓を得てまとめられたマニュアルを翻訳、加筆した『災害に遭った子どもたちへ—小学校教師のためのマニュアル』を購入しリーダーシップ養成に役立てた。



④ 救援NGO団体活動支援支出 ￥1,500,000.

1. 外国人被災者支援連絡協議会(事務局KCC)
2. 阪神大震災地元NGO救援連絡会議
3. 兵庫県日本語学校就学生・留学生等支援の会
(事務局神戸YWCA学院専門学校内)

被災地で特に積極的に外国人、子ども、高齢者、仮設住宅の人々への支援を行っている3つの団体に対しての資金援助。



⑤ 事務局経費 ￥972,526.

①～④の救援事業をはじめ、様々な緊急救援、復興事業を積極的に・継続的に推進するための人件費、記録、通信費などの経費。

⑥ 収支

JCCCNC義援金 ￥14,715,000.
(US\$15万ドル1ドル=¥98で換金)

救援活動支出 ￥13,873,187.

繰越残高(1996年3月31日現在) ￥841,813.

アメリカ・北カリフォルニア

日本文化コミュニティセンター

JAPANESE CULTURAL AND COMMUNITY CENTER OF NORTHERN CALIFORNIA (JCCCNC)

1973年以降、カリフォルニア州にて非営利団体として承認されたJCCCNCは、会員、参加者6000名以上にのぼる北カリフォルニアにおいて、最大の日系米国人を中心とした草の根の民間組織である。51名からなる理事会と8名の常勤職員と中心になって活動している370名以上のボランティアによって運営されている。サンフランシスコ市のジャパントウンにコミュニティサービスビル、コミュニティホール、体育館の施設がある。JCCCNCオーナーシップ基金名誉会員は、米国上院議員のダイアン・ファインスタイン氏、元カリフォルニア大学理事のリョ・ワダ氏らである。現在理事長はカズ・マニワ氏で、事務局長はポール・オサキ氏である。1992年冬期オリンピックのゴールドメダリストである、クリスティ・ヤマグチさんもセンターを支援している。日常活動は日本文化、芸術のクラスのほかに子供たちにはスポーツ活動、レクリエーション活動をおこなっている。毎週2000食以上の昼食をサンフランシスコの高齢者に提供している。日本企業や政界、学会、文化方面の指導者を講師に招いてのセミナー、昼食会ももたれている。

今回いち早く救援活動に立ち上がり、衣料やおもちゃなど救援物資段ボール600個以上と義援金20万ドルが大阪YMCAに届けられた。

このような支援の陰には大阪YMCAの在米事務局長で元大阪YMCA専任教員の村上健氏の助力に寄るところが大

きいことを記して、感謝の意を表したい。



1995年11月、JCCCNCより新たに5万ドル(5,115,000円)の寄付をいただきました。

紙面をお借りし、多大の支援と暖かいはげましに感謝申し上げます。

ボランティア・フォーラム'95

阪神・淡路大震災での緊急救援・復興活動を踏まえYMCAのボランティア活動の意義と展望を話し合う機会を持った。人材育成、ネットワーク作り、情報の収集、整理・発信システムの確立、資金づくり、日常よりのボランティア活動の実践などの視点から熱心な討議がなされた。

日 時：1995年10月7日(土)	主 催：大阪YMCA会員活動委員会
会 場：大阪YMCA会館10階	参加人数：56名(ボランティアリーダー、スタッフ、一般会員など)

大阪YMCAボランティア・フォーラム'95 参加者よりの提言

YMCAに求められるこれからのボランティア活動推進キーワード

人材育成

人々の中に芽生えているボランティアの芽をどう育てていくか、コーディネートする側の人材育成、また自分で考え、行動できるボランティアの人材育成の必要性

ネットワークづくり

YMCAの財産は「人」である。全国のYMCAにつながる中で、多くの人材があり、ネットワークがある。このYMCAのスケールメリットを最大限に生かすべきである。

人の役に立つ、人を動かすための情報の収集、整理、発信システムの確立

資金づくり

マスコミに訴えての効果的な資金づくり、さまざまな助成団体の効果的な利用

HEART TO HEART のコミュニケーションとしてのボランティア活動の実践

自分の日常、地域、ランチにおいて何ができるかを考え、普段から地域の中でボランティア活動の実践を..

ボランティアとは



- 相手の側の気持ちや欲求は何であるかを考え、何をすべきかを考え行動できる人。(場所や仕事の内容が用意できていても同じ)
- 必要であればグループを組み、良いグループバランスで活動できる人。(一人で行動する時もあるが、いろいろな意見を出し合う時また、活動によってはグループ活動の方が効果のある時が多い)
- 相手の自立を支援する人。(自分の満足できないことは、早く引き下がることのできる人)
- 責任をとって行動する人。(自分の意志で始めることだが働きだした時に援助される人に対する責任、共に働く人への責任が生じる)

- 自分がどんな人間であるか知っている人(個人でグループを組む場合、嫌いな人、合わない人が一人や二人いますが、よく見てみると自分に似ている場合が多いことの認識の必要性。逆に救助される人を見つけた場合は自分自身を知っていることを有効に利用)
- 自分のライフスタイルに活動を移行できる人。(今回だけでなく日常地域に自分が戻ったときに、尚且つベーシックに人の援助をしようとする人)
- 人に迷惑をかけないこと。(援助を必要とする人たちにグループで関わる時、グループの中での協調性が必要)

助けるという気持ちや私がという気持ちではなく、頭を下げへりくだった思いで支えることが大切。復興するのは彼等。

(上記は阪神・淡路大震災復興協力ワークキャンプディレクター神戸YMCA近江岸建助主事のオリエンテーションより)



海外からのお見舞いと支援レター 世界の国から～ありがとうございました

ソウルYMCA Chun Dai Lyun, President

心からお見舞い申し上げます。ヨハネの黙示録の数節を思いおこさせる震災ではありますが、この不幸はやがて新しい世界を生み出すことと確信しております。困難を乗り越え復興に向かおうとする日本のみなさんの冷静さと秩序に感銘を受けるとともに、一日も早いご回復を祈ります。

スリランカYMCA同盟 Asoka Weerasinghe, General Secretary
あなた方とともにあり祈ります。

マンダレーYMCA Tha Sein, President & Maung Maung Win, General Secretary
マンダレーYMCAにつなげる私達は日本のみなさんと同じように心をいためております。復興に向かうあなた方を神がお守りくださいますように。

バングラデシュYMCA同盟 Harold Biswas, National General Secretary
神がこの悲劇のただ中にある人々とともにおられますように。
(レター右上)

香港・ボヒニア・ワイズメンズクラブ ソフィア・フォン

大阪のワイズメンズクラブが救援のプロジェクトをお持ちでしたら、詳細をお知らせください。香港の全クラブが義援金を集めることにしました。ささやかな額かもしれませんが、ぜひ協力させてください。



ハワイ・ヌアヌ・ワイズメンズクラブ

「アロハ神戸プロジェクト」を金曜の夜6時から10時まで行いました。国籍を越え世代を越え、カブスカウトの子供達から80才代のお年寄まで多くの人々が集まり、自分達にできることをしようとする様子は、ほんとうに心暖まる光景でした。衣類や食料、日用品などの救援物資を仕分けし、箱詰めし、表示しました。ホノルルメトロポリタンYMCAドン・アンダーソン総主事によれば、575箱の物資が準備できましたが、これは一晩でする荷造りとしては最大のものだということです。ボランティア精神はすばらしい。役にたてるという気持ちをみんなが持てるのですから。他のクラブでもプロジェクトを続け、プロフットボールの試合を見にくる人々には、義援金か伝言を持ってきてもらうようにします。ハワイでも多くの人々がこの神戸プロジェクトのためにがんばっていることがわかりただけだと思います。

ドイツ ハノーバーYMCA
Mr.Martin Germeroth 総主事よりの手紙

支援レターリスト・世界のYMCAから

シンガポール・メトロポリタンYMCA、中国YMCA同盟、上海YMCA、西安YMCA、台北YMCA、台南YMCA、台湾YMCA、台湾YMCA同盟、マニラYMCA、スリランカYMCA同盟、マンダレーYMCA（ミャンマー）、アンマンYMCA（ヨルダン）、ホノルルYMCA、バンクーバーYMCA（カナダ）、ハノーバーYMCA（ドイツ）、ノルウェーYMCA・YWCA

Mr.David Chang（台湾）、呉 建茶（中国）、黄 祖貽（中国）、村上 健（米国）、Mr.Thomas（米国）、Pete Bawer（米国）、Ben Casey（米国YMCA World Urban Network）、Fred E.Stickney（米国）、William Suzuki（米国）、Paul Osaki（JCCCNC）、Jonathan Fong（シンガポール）、Henry Labatte（世界都市Yネットワーク）、Prof.David Johns（ブラッドフォード大学、英国）、Prof. Colin Mellros（ブラッドフォード大学、英国）、本間 立男（米国）、藤岡 宏樹（シンガポール）、中村 隆（台北）、Li Showpoa（中国YMCA全国協会）、田全徳（中国）

○大阪YMCA義援金及び阪神大震災緊急復興募金(神戸YMCA復興募金)者リスト(順不同)

22

大阪YMCA救援活動 データ

1.大阪YMCA義援金(1996年3月31日現在)

震災後、自然発生的に協力会員、教職員、生徒、賛助会、ワイズメンズクラブを始め、各地より義援金 YMCA に寄せられる。おもに緊急・救援活動費、被災家庭学生スカラシップ、西宮YMCA救援活動支援、被災地のこども達のキャンプ実施、救援団体支援などのために用いられる。

大阪YMCA義援金	18,743,751円
JCCCNC義援金	14,715,000円(1995年 2月送金)
	5,115,000円(1995年11月送金)
	38,573,751円

※JCCCNC=北カリフォルニア日本文化コミュニティセンター

2.阪神大震災緊急復興募金(1996年3月31日現在)

神戸YMCA復興・再建事業に要する諸費用、会館復旧工事と施設・設備の修理、備品の購入、その他地域復興活動を推進するために全国YMCAで募金目標額を1億円とし、神戸YMCA復興支援募金を実施

この一環として大阪YMCAにおいて阪神大震災緊急復興募金を1995年4月よりスタートした。

復興募金額	14,826,495円
-------	-------------

3.大阪YMCAボランティア動員数

- 大阪YMCA東本部、救援ボランティアセンターを通じて約1,638名が西宮YMCA、西神戸YMCAでの救援・復興活動に参加

1995年1月20日～2月28日約1,638人
100人を越えた日：1/26, 27, 28
50人を越えた日：1/23, 25, 29, 2/2, 4, 5

※上記数字は、あくまでも大阪YMCA東本部、救援ボランティアセンターを通じてボランティア活動に参加した人数。以後、復興協力キャンプの実施でボランティアが活躍した。

- 「応援する市民の会」大阪YMCA事務局を通してボランティア登録活動者数約1384名被災者及び家族受入れホストファミリー登録件数338件セッティング件数16件

1.緊急物資

被災地での配達業務が復活する2月中旬頃まで大阪YMCAに教職員、ワイズメンズクラブ、ボランティア協会、団体、教会、生協、一般個人など全国各地はもとより海外から救援物資が集まった。

1995年1月20日～2月中旬頃 計323件

緊急物資(カイロ、電池、ガスコンロ、テント、ビニールシートなど)、日常生活用品(医薬品、整理用品、おしめ、トイレットペーパーなど)、衣類(毛糸、下着など)、食料(飲料水、米など)、運搬用品(自転車、50CCバイク、トラックなど)などたくさんの品々が寄せられた。

編集後記

震災後早くも1年が過ぎましたが、被災地では復興の足音とともに、ますます問題が複雑化し、被災者の住宅や生計の問題をはじめ課題が山積しています。130万人ともいわれた一般市民ボランティアやグループの励ましや支援がこの現状を切り開き、自治体や政府のサポートを引き出す力となることを期待しています。

大阪YMCAが今回の震災にあたり多くのかたがたの支援を得ながら救援・復興活動にあたりましたのも長年のYMCAの活動の積み重ねや人間的なつながり・ネットワークのおかげだと考えています。

この活動報告書にのらないものが多々あり不十分かと思いますが、活動の一端を紹介させていただき、あわせて今後の貴重な体験の資料として頂ければ幸いです。報告書作成がおそくなりました。書面ですがおわびいたします。今回の報告書作成にあたり、ボランティアの稲垣康子さんには特に編集からワープロ打ちまでご協力いただき感謝しています。

大阪YMCAでは、1882年(明治15年)創立以来ボランティアアソシエーションとしての開かれた市民活動を展開してきましたが、21世紀を目前にして、YMCAの使命・目的の実現にむけ私たちが共に歩むことを始めたいと思います。

1996年4月10日
大阪YMCA 真嶋 克成

発行：(財)大阪キリスト教青年会(大阪YMCA)
〒550 大阪市西区土佐堀1-5-6
電話(06)441-0894
発行人：増成 恒哉



～復興を願って～

作：猪瀬正雄

切り絵：ラインの館(神戸・北野)